
恋する乙女は悪魔っ子！？

三月語

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋する乙女は悪魔っ子！？

【Nコード】

N8224X

【作者名】

三月語

【あらすじ】

何処にでも居そうな普通な、しかし異性が苦手な少年、榊敏豪。

彼が容姿端麗・優秀な少女の、口外できない秘密を知った時、彼の学園生活は波乱に満ちたものとなった・・・

初の一次です！至らないところも多々あると思いますが宜しくお願
いします！指摘等ありましたら感想でござ。

そのいちっ！ 助けた女の子は・・・（前書き）

この物語はフィクションです。実在の人物、団体とは一切関係がありません。

初一次です。見苦しいところもあると思いますが、そこはご了承ください。

後、今までとは書き方を変えております。私の「二次」を見ていた人にとっては『代筆？』と思われるかもしれませんが、ちゃんと自分で書いてます。

そのいちっ！ 助けた女の子は・・・

・・・一体何がどうしたらこんなことになるんだ・・・？

目の前には学校一の美少女って言われる代永がいる。・・・苦手な異性が。

・・・何で俺がこんなことしてんだ・・・？

）朝）

「でき、沢木のやつボール踏んで一回転したんだぜ？」

「バカじゃね？ってことはよ、着地まできっちりこなしたのか？」

「当然！満場一致で10点あげたからな」

「10点10点10点10点……ってか？そりゃ俺も見たかったぜ……」

朝、歩いて登校する二人の男子。片方は俺、榊敏豪。隣にいるのは俺の……悪友？の桐生一樹。

昨日、一樹の所属しているサッカー部で起きた面白出来事について話していたわけで。

「そっちはどうだ？ちったあ楽しめる部活だったか？」

「全然。パソコンを使うと言うよりどっか走り回るのがメイン、って感じ。運動部かよって」

「なんでコンピ部が走り回るんだよ・・・」

「部活の写真撮影だってよ。学校のHPの部活動紹介に使うんだってさ。まったく、いい迷惑だよ・・・」

で、ちよつと歩いて行ったら・・・

「・・・お」

「どうした？」

「あれ見るよ。うわ、間近で見たの初めて見た」

顎で示された方を見たら・・・女子？

「なんだよ、いつもの癖か・・・」

「癖ってなんだよ癖って！つかあの子代永じゃん！学校一の美人って言われてる代永咲夜華じゃん！やべ、マジ可愛い・・・」

「・・・たく、どうせ鼻の下伸ばしてたりするんだろ？お前の変態癖って何とかなんないものかねえ？」

「・・・たくよお、お前は・・・ってそう言えばお前女嫌いだったんだっけ」

「そっだよ、悪いか？」

「・・・悪い、すっかり忘れてた。ホント悪い」

・・・俺は過去・・・小5の頃に女子に思いつきし弄られてから女

子嫌いになった。今もまだ女子に近づきたくもない。それくらい毛嫌いしている。

「ま、お前が明らかに好意を寄せているってのはよく分かってるからよ、安心しな。からかいくらいはしてやつから」

「最低だな、おい。でもそれがお前のいいところなんだよな」

お互いに色々と皮肉り合いながら教室に向かった。

そして放課後

「くっそ、野球部どこで活動してんだよ!!」

俺は部活動で校舎の外を走り回っていた。野球部が見当たらない！
！何処だっけ!？

「あつちはまだ見てなかったはず・・・ん？」

ふっと道を見たら、代永が一人歩いているのを見た。・・・親衛隊
は・・・いないみたいだな、珍しい。

「・・・何してんだ、アイツ？」

見ていると代永はふらふらとしている。・・・なんか気を抜いたら
ぶっ倒れそうな・・・

「って倒れかけてる!？」

慌てて俺は駆け・・・寄ろうとしたが体が動かない。

「・・・くそっ・・・こんな時に異性恐怖が・・・!でも・・・止
まってるれっか・・・!」

相手が異性だって関係あるか・・・！

何も考えることなく、俺は代永の元へ走り始めた。

そして今

「よ、代永！おい、大丈夫か！？」

「あ……う……」

……よかった、まだ意識はあるみたいだ……

「……一体……どうした……？」

「……が……い……」

「……？」

な、なんだ……？何て言ったんだ……？

「……血が……ほしいよ……」

そのいちっ！ 助けた女の子は・・・（後書き）

今回は秘密が明らかに。

更新は不定期ですので、更新催促はしないでください。

後、荒らしは絶対厳禁です。即時消しますので。

そのにっ！ 助けた女の子は吸血鬼！？（前書き）

第二話です。なんとなく連投してますが気にしない方向で。

今回は咲夜華の秘密が明らかになります・・・というかタイトルで分かるかと。

そのにっ！ 助けた女の子は吸血鬼！？

「……は？」

代永のやつ……何言ってるんだ？「血が欲しい」とか……吸血鬼じゃあるめえし……

「代永？おい、気は確かか？」

「血が……ほしいよぉ……」

……これ、冗談抜きで考えるべき？本当に吸血鬼って考えるべきなのか？

「……代永、鞆の中見るぞ！」

俺は代永を抱きかかえたまま、何かないかと彼女の鞆の中を開けてみた。……が、中に所謂輸血パックとかそういう類は……ない。

……マジでどうするんだよ、これ……

「……あ……」

「・・・はふう・・・お腹いっぱい・・・
また・・・またやっちゃった・・・」
「・・・あっ!?!?ま、

「・・・？」

目が覚めたら、見知らぬ天井・・・なわけなく、保健室の天井が見

えた。

「……あん時、代永に首に噛みつかれた……というか……多分ホントに血を吸われたんだと思うけど……気を失ったんだっけ……」

「あ、目が覚めた？」

「……よ、代永!？」

声が出た、と思って横を見たら代永がいた。……また噛みつかれたりすることないよな!？」

「な、何もしないよな……!？」

「その……ホントにゴメン!？」

パン!と手を合わせて代永が謝る。

「……あれ？」

「……ところで……あのさ、代永？」

「な、なに？」

「お前って……一体何者なわけ? 「血が欲しい」って言ったり首に噛みついたり……まんま吸血鬼そのものな感じだけど?」

「そ、それは……その……」

代永は言いたくなさげに「にょにょ」と口ごもった。

「言いたくないなら言わなくてもいいけど」

「え、えと、その・・・ね？あまり他の人に言ってほしくないんだけど・・・」

言いたくないようなことを無理して言うようにポツリ、ポツリと言いだした。

「私・・・吸血鬼なの」

「・・・は？」

「だから、私は吸血鬼なの！」

「吸血鬼ていうと・・・ヴァンパイアとかそういう類？」

「・・・うん」

「ヴァンパイア・フィリアとかじゃなくて純粹に？」

「さっきからそう言ってるよ」

最初は冗談かなんかだろうって思ったけど、聞き返した時に断言したってところから冗談とかじゃなくて、目の前にいる女子が本物の悪魔・・・。

確認でヴァンパイア・フィリア、別名吸血病（聞いたことがあるだけ。血を好む嗜好だ、とか血を飲まないと気が済まない、とか・・・）を疑って聞いてみたけどそれも違う。

目の前にいる女子は、紛れもなく吸血鬼なのだ。

「・・・なんとなく納得できるようなそつでもないような・・・」
「絶対に知られちゃダメって、お母さんにきつく言われてただけどね・・・高校入ってすぐばれちゃった・・・」

あはは、と笑う代永。しかしその顔はどこか悲しげだった。

「・・・で？どうしたいんだ？口封じでもするか？」

「そ、そんなことしないよ！ただ黙っててもらえればそれでいいし、私にそんな力ないもん！」

「ちょ、ストップ！近づかないでくれ！」

ズイツと体乗り出して近づく代永。俺はそれを体を大袈裟に遠ざけてまで拒絶する。

・・・やばい、鳥肌が・・・

「・・・どうしたの？」

すぐに言った（というか叫んだ）のが幸いしてか、すぐ離れた。鳥肌が立っていた。

「・・・悪い、俺異性が苦手なんだよ・・・つか嫌いレベルで・・・あ
」

途中まで言っていることに気付いた。

「だったら、俺の異性嫌い直すのに付き合ってくれないか？」

等価交換の原則、とでも言えいいのか？この提案なら乗ってくれると思う。

別に「恋人になってくれ」とか、ものっそいエロい事を言ってるわけじゃないし。こっちは黙っておく、っただけだと代永が拒否しそ
うだしな。「榊君に苦労ばかりさせられないもん」とかいつて。

「それなら・・・いいよ？・・・よかった、えっちいことしてくれ、
っって言われるかと思っただ・・・」

・・・なんで同じことを考えてんだよ代永のやつは。

「・・・あのね、榊君」

「・・・なんだよ」

「榊君って・・・前私を助けてくれたりしなかったっけ？」

「・・・知らね」

「・・・そう、だよ。こんな都合よくその人がいるわけ、ないも

んね」

突然聞かれたことにそっけなく答える俺。

・・・気のせいだろ。俺も代永のことどっかで見たことあるような・・・なんて思ってるけど。

「・・・それとき、友達に・・・なってくんねえかな」
「友達？」

「俺、こんなだから、異性の友達いなくてさ・・・」
「友達・・・うん、いいよ！私も欲しかったんだ、気軽に話せる男の子の友達！」

突然代永が俺の手を握ってきた。それはそれは嬉しそうに・・・って！！

「うおわあああっ！！だ、だから手を握ったりしないでくれ！と、鳥肌が、鳥肌が立つから！！」
「あ、わ、ご、ごめん！」

俺が怒鳴る勢いで言うと代永はすぐに離れてくれた。

そのにっ！ 助けた女の子は吸血鬼！？（後書き）

今回は親衛隊（笑）が登場します。

この親衛隊（共）、自分でもネタキャラにします。ついでに言いつこいつら、所々出てきます。次話以降。

あ、空鍋とかは出てきませんので。ヤンデレキャラを出さない・・・つもりです。空鍋を出さないことは公言しておきますが。

そのさんっ！ 代永咲夜華親衛隊の恐怖（前書き）

この小説最大のネタキャラ軍団、親衛隊の登場です。キモかったり笑いのつまみになったりなど、お好きな扱いでどうぞ。

そのさんっ！ 代永咲夜華親衛隊の恐怖

「敏豪、今朝フラフラしてたけど一体何があった？」

「……気にすんな、昨日寝るのが遅かったただだよ……」

朝、いつものように一樹と歩いていた。

「ま、気にしないでおいてやるよ」

「助かるぜ、とっつぁん」

「バカ、まだ老けてねーよ！まだピチピチの15歳だっつもの！」

「……わり、さすがにそれは引くわ……」

「……すまなかった……」

お互いからかい合いながら（最後は見事にすべらかした一樹に引きながら）校門をくぐって玄関に着いた時だった。

「あ、榊君おはよ」

「お、おう……おはよう、代永……」

玄関ですれ違った代永に挨拶され、俺も（半ば怯えながら）返した。それを一樹にしつかりと見られていた……

「……なあ、敏豪」

「・・・なんだ？」

「お前いつ代永と仲良くなっただん!? 昨日まで挨拶されることもなかったじゃねえかよ!!!」

「昨日転んだ所に俺がいて下敷きになったのを助けられたと思われただよ、それ以外に何かあるのか!？」

一応あのことは伏せておいた。代永との約束だし。

「・・・お前、今日が命日なるかもな・・・」

・・・今日って・・・ああ、そう言えば代永には親衛隊がいるって
いってたっけ・・・。・・・さらば、俺の人生。

「敏豪、俺はお前と共に死んでやるからな、だから安心して死んで
こい」

「・・・どうしてだろう、目から汗がたらだと・・・」

正直、一樹の心ないような気遣いが心に染みだその瞬間だった・・・
。道連れ大歓迎だが、先に死ねってというのは・・・

「貴様っ！我らが姫を誑かしたな！？」

そして悲劇は起きた。マジ悲劇。どうしようもないくらい悲劇。はつきり言おう、これが今後の俺の学校生活の障害になった。階段登るうとしたら踊り場に変人がいた。

「・・・なあ、もしかしてあれ・・・」
「もしかしてももしかしなくてもあれだな、というか「我が姫」
つて・・・」
「・・・ぷっ」
「笑うな!!」

俯いて笑いをこらえる俺と一樹。・・・いや、だつてな？一人称「我」つて今まで聞いたことないぞ!?しかもポーズがキモい(俺達に向けて指をビシッ!と突き付けている。脚も変にクロスさせて・・・なんかキザっぽい感じでやってるけど・・・如何せん基盤がキモいからキモさも当社比三割増し)!んでそれが笑いを助長させてんだよ!!

「ええい、そんなことはどうでもいい!榊敏豪!今すぐ我が姫から離れる!!」

「・・・なあ、今・・・」

「明らかに名前間違えたな。というか普通は敏豪としかひでって呼ばないけどな」

「・・・シャラップ!!」

・・・どうしよう、「冗談抜きで我慢の限界きそうな・・・」

「・・・面倒だしスルーしようぜ、スルー」

「そうだな、こんな奴に構って遅刻とか恥以外の何物でもないしな」

俺達は階段を上ってさっきから「ビシィッ」と指先をこつちに突き付けたままのポーズをとった変態（笑）を大袈裟に避けて進む。
・・・第一こんなのと関わっていたら一体どれだけの俺が笑い死ぬか・・・

「・・・・・・・・」

そして変態は呆然と立ち尽くす。何一つ言葉を発することもしない。
・・・ザマミロ。

「き、貴様！我らを敵に回してこれで済むと思うなよー！」
「あーはいはい。敵にでもなんでも勝手に回せー」

後ろからあの変態の「ぐぬぬ」という声が聞こえたが、俺達は一切合切無視して教室へ向かった。

教室に入ってから悲劇は続く。

・・・つか親衛隊って、こんなにいたのね・・・

「殺せつ!!」「殺せつ!!」

「開口一番に「殺せ」って！たかが挨拶だろうがよ!!」

「さすが親衛隊、自分達がされないことを他人がされると途端に殺戮マシーンに早変わり・・・」

俺は教室から走って逃走、それを追いかけ始めた親衛隊、総数15人。全員釘バット所持がデフォルトなのはご愛嬌。

「我が姫を誑かす輩はーっ!!」

「Search and Destroy!!見敵必殺!!」

「だからなんで殺されなきゃならねえんだってのーっ!!」

ちなみに俺は始業ベル直前で先生に保護してもらえた。親衛隊の奴らは皆説教。・・・通称『生徒指導室の化け物教師』に・・・

「・・・さすがに昼に現れるなんてことはないだろ」

「だよな。代永はいねえし、落ち着いて飯も食える・・・あ」

鞆を開けて気付いた。朝、昨日のことでグロッキーになっていたから昼飯作ってくんの忘れた・・・

「・・・一樹、悪い。先に飯食っててくれ。購買でパン買ってくる」
「おー、気をつけてなー。くれぐれも代永に会って話したり親衛隊
にあったりするなよー」
「うーい」

一樹の忠告を背に教室を出た瞬間だった。

「発見、我らがEnemy!!」
「うわ、ダサっ！何処の日本語習いたてな外国人だよ!!」
「捕まえる、そして殺せ!!」
「捕まるかっての!!」

そして第二次逃走劇が始まった。・・・なんか朝より人数増える
気がするんだけど!?

「・・・はむっ」

教室の、自分の席（隅っこ）で女子が一人、黙々と弁当を食べていた。

「・・・代永、咲夜華・・・。魔族類に該当する可能性大・・・尻尾を掴み次第討魔を開始する必要あり・・・なのです・・・あむ」

何やら物騒なことを言っていた・・・が、その後の一言が物騒さを

打ち消してしまっていたのはご愛敬だ。

「な、何とか、撒いた、か・・・」

購買で、俺は一息ついていた。親衛隊の奴ら、便所を上手く使って逃げ切ることが出来たようで・・・

「あれ、どうしたの榊君？」

「……マジで？」

声をかけられてそつちを見た時、そこにいたのはもう一つの危険因子（俺的に）、代永だった。

親衛隊の奴らは……きつちり撒いたな、いない。

「……親衛隊の奴らに……追われてたんだよ……」
「親衛隊？」

どうやら代永は親衛隊の存在は知らないらしい。……というかあんな馬鹿騒ぎしていて全く知らないってのもどうかと思うんだが。

「……気にすんな。ホントなら飯買いに来ただけなんだよ……」
「そつか。その親衛隊って人達に気をつけてね？」
「……気をつけるよ……」

適当にサンドウィッチを二つ買って立ち去る俺。いつまでも代永と一緒にいたら何ればれるからな……居場所。

放課後。あいつらは本当にしつこかった。

「榊敏豪えっ！！本日昼、姫と会って話をしたというのは本当かっ
!?!」

「……敏豪、マジか？」

「……購買行ったら偶然……というか元はというとお前らなん

だよ！！お前らが追いかけて回したりしなきゃ何事もなかったんだっつーの！！」

生徒玄関を出て数メートル歩いたところで・・・奴らの群れと鉢合わせ・・・つかいつ唇に会ったのを知った？俺誰にも言っていないぞ？

「問答無用！我らの姫を汚す輩は・・・死してその罪を償うべしっつー！！」

「だからって簡単に死ぬるかよおっ！！」

恒例釘バット軍団が突撃しようとしたその瞬間だった。

「あれ、これって一体何？あ、榊君も」

彼らにとつての姫、俺にとつては・・・救世主・・・とでも言うのか？代永がいた。

「ひ、姫・・・」

「今日も・・・神々しい・・・」

「ああ・・・これで何時死んでも・・・いい・・・」

「え、えーと・・・どういう・・・こと？」

突然ひれ伏したり崇めたりなど、なんかよく分からない行動（
というかあいつらにとっては崇拜している感じだが）に代永は困る。

「・・・昼に言ってた親衛隊だよ。代永の。」

「え、ええっ!? わ、私の!? そ、そんなの困るよ・・・」

本当に困り果てた様子の代永。しかし目の前にいる連中は行動を止めようとしない。

「代永、解散っていつてみたら?」

一樹が助け船を出した。簡単に言えば、崇拜している奴らなのだから、『解散』とでも言えば散る、という考えだ。

「え、えと・・・か、解散!」

代永が恥ずかしそうに「解散」というと・・・

「了解しました、姫様!」

「ひ、姫!」

盛大な崇拜ボイスと共に軍隊さながらの解散を見せた。というか靴

音を揃えて立ち去る奴らを初めて見た。

そして去り際の「姫」発言に代永は困っていた。

「……姫……そんな大層な人間じゃないよお……」

……否、照れていた……

そのさんっ！ 代永咲夜華親衛隊の恐怖（後書き）

今回ちよっぴり出てきた、ちよっと特徴ある口癖の女の子。彼女は2話ほどくらいで大きく関わってきます。なんとなく雰囲気はあれですけど。

一話あたりの文字量は大体1400〜3500の間にするつもりです。少ないなどあるかもしれませんが、そこは勘弁していただくと幸いです。

そして最後に。

急展開過ぎる展開は、目をつぶって頂けると嬉しいです！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8224x/>

恋する乙女は悪魔っ子！？

2011年10月26日02時59分発行